

# KEYワード

第  
94  
回

## 時空を越えたノスタルジー散歩をどうぞ

# リアリズムも鳥瞰図の魅力

人間は、鳥の目線で町や山河を描いた鳥瞰図に魅せられる。衛星写真やドローンによる空撮は、あくまで現在の風景であって、グーグルマップで検索しても、大坂冬の陣の真田丸の勇姿は見る事ができない。百年前の街並みや歴史的な出来事を疑似体験できるのが鳥瞰図であり、大正昭和の観光案内のパンフレットに描かれた鳥瞰図もノスタルジックである。

鳥瞰図が得意で「空飛ぶ絵師」とも呼ばれた歌川貞秀(1807~1879?)の錦絵「大坂名所一覧」(大阪府立中之島図書館蔵)は、天保山や淡路島まで視野に入れた9枚続きのパノラマであり、生涯に3,000点以上の鳥瞰図を描いたとされる吉田初三郎(1884~1955)も有名だ。6月刊行の本渡章さんの『鳥瞰図!』も、各地の鳥瞰図約100点を紹介する。

近代大阪では、大正13(1924)年、日下わらじ屋刊行の「大阪市パノラマ地図」が魅力的である。翌年に第二次市域拡張で日本最大の都市“大大阪”になる直前の大阪市の精細な鳥瞰図で、現在の大阪環状線の内側と港湾地域を中心に描き尽くす。画家は美濃部政治郎。タイトルの「大阪市パノラマ地図」と英文題「THE MOCK PAINTED PICTURE OF GREAT OSAKA(グレート・オオサカの模擬景観図)」にあるように、グレートと呼ぶにふさわしい出来映えである。

このパノラマでは、当時の建物や道路などを具体的に確認できる。淀屋橋の「住友ビルディング」(現三井住友銀行大阪本店)は、大正15(1926)年に北側、昭和5(1930)年に南側の工事が完成するので、地図制作時は工事中で、工事現場の仮囲いが描かれている。いまなら未完成でも完成予想図を加えるかも知れないが、あくまで工事現場の囲いにこだわるのがリアルである。

美術品に描かれた昔の大阪名所をパノラマ地図に検証することもできる。昭和3(1928)年の池田遙邨《雪の大阪》(大阪新美術館建設準備室所



淀屋橋付近では住友本店が工事中(左)、天満橋から突きだした床机島(右)「大阪市パノラマ地図」より。

蔵)にも描かれた天満橋から下流に突き出した将基島も、パノラマ地図によって地形が具体的に分かった。昭和7(1932)年に寝屋川が天満橋上流で大川と合流するように付け替えられ、下流が埋め立てられたことで、将基島は消滅する。その跡に建つのがOMMビルや京阪シティモールであり、ビルの下はもともと寝屋川だったのである。

大阪の鳥瞰図では、昭和10(1935)年、西区江戸堀の東亜地誌協会編集発行の「鳥瞰式立体図大大阪市市勢大観」(大阪市立中央図書館蔵)も圧倒的である。吉田豊が描いた縦141cm、横172cmの巨大な図で、千里山や枚方、八尾など近郊も描かれ、パノラマ地図の10年後の街の変貌が一目瞭然である。ただ、刊行後80年以上が経ちながら著作権者が不明で、図版掲載できないのはもったいない話である。

とりえず「大阪市パノラマ地図」は、大阪くらしの今昔館の常設展示室の床に拡大複写されているので、誰でも上を歩き、鳥の眼差しで“大大阪”を探索できる。道路に打たれた豆粒のような通行人や、御堂筋開通前の船場、通天閣と国技館が並ぶ新世界など、とても面白い。パノラマ地図の複製も刊行されており、それを手に街歩きしたら、道路が基盤状の都心など、今でも迷わず歩けるかも知れません。



大阪くらしの今昔館の床にある「大阪市パノラマ地図」で自分の家に何があったか探してみよう。

### 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像―」(創元社)など。